

Jan. 2015

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2015 [Vol.7]



貴館のアートコンテンツを活かした
スマートフォンケースを

在庫レスで商品化しませんか？

その場で製作販売するイベントも可能です。

<https://www.onecover.jp/>

カザスマートをダウンロードしてこのページにかざすと
詳細がカラー（動画）で見られます。

1



アプリをダウンロード

App StoreあるいはGoogle playで
「カザスマート」と検索してダウンロード。

2



起動してスマホをかざす

対応OS:iOS4以上/Android2.2以上。
デバイス、OSのバージョン、通信状況により、作動
しない場合がありますのでご了承ください。

3



コンテンツを見る、楽しむ

商品紹介の動画がスタートします。

ブロック報告

- [北海道] 美術とコミュニティのあり方を思う 久米淳之 ● 2
- [東北] 場所を継ぐ 原田久美子 ● 4
- [関東] 遊びと美術館 小泉淳一 ● 6
- [東京] 「エンナーレ」の時代と東京オリンピック 富田 章 ● 8
- [北信越] 今日の美術館事情 横山秀樹 ● 10
- [東海] 写真の展示と展覧会—受容のいま 正村美里 ● 12
- [近畿] 所感を織り交ぜて 篠 雅廣 ● 14
- [中国] 2014年秋・島根彫刻展めぐり 川西由里 ● 16
- [四国] 四国の美術館概況 松村 円 ● 18
- [九州] 九州地区の動き 園田博一 ● 20

部会報告

- 保存研究部会 相澤邦彦 ● 22
- 教育普及研究部会 遊免寛子 ● 23
- 情報・資料研究部会 川口雅子 ● 24
- 小規模館研究部会 横山由美子 ● 25
- ホームページ部会 宮武 弘 ● 26
- 機関誌部会 尾崎信一郎 ● 27
- 美術館運営制度研究部会 大島徹也 ● 28
- 地域美術研究部会 山田 諭 ● 29

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 32

投稿要領 33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.7 2015年1月1日発行 ©全国美術館会議

[編集] 全国美術館会議機関誌部会 編集幹事 尾崎信一郎 松山利光

[発行者] 全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

[デザイン] 宮谷一孝 (株式会社エヌ・シー・ピー) [印刷] 日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

美術とコミュニティーのあり方を思う

久米淳之 (くめあつし・北海道立函館美術館)



北海道ではこの夏「札幌国際芸術祭 2014」(7月19日～9月28日)が開催された。観光にも最適の時期、旅行を楽しみながら訪れた人も多かったろう。結果として国内外の64作家が参加、72日間に48万人の動員。会場別では、有料の展覧会の北海道立近代美術館と札幌芸術の森美術館では6万6900人、その他で無料の展示、イベントが行われた場所では、札幌駅前の地下歩行空間11万6300人、500m美術館他の会場は27万5000人の動員があったという。この主会場のほか、市内17のギャラリーが「ハコレン」と称して連携し、さまざまな展覧会を開催、また札幌の展開に繋がろうとする活発な動きが道内各地へ拡散し、連携もしくは芸術祭への対抗意識によって立ち上がった展覧会なども多くあり、国内の先輩格の芸術祭に比して、北海道特有の動きとなったことは特筆すべきだろう。連携企画としては夕張、三笠で開催された「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト 2014」(8月23日～10月13日)などがあり、またおそらく前向きな対抗意識により、北見で「FAR EAST コンテンポラリーアート 2014」(8月10日～9月14日)が開催された。しかしアート・ツーリズム隆盛の昨今とはいえ、すべてをつぶさにみて廻るには距離があり、期待された動員には至らなかったのは否めないかもしれない。それでも特に市内においては会場を巡ることそのものが、都市と自然が融合している札幌の都市構造を体感できるという、芸術祭のテーマにつながる重要な役割を備えているし、何より芸術祭を通じて

北海道の現在の美術の状況が結ばれ、見渡せる仕掛けになり、北海道のアートシーン全体は華やかに彩られたといえる。「わかりづらい」「生真面目すぎて物足りない」などの評もあったが、継続して開催されることに前提と意義がある以上、検証と分析はこれから、あらゆる視座でなされるだろう。大事なことは、人々が芸術祭について対話を豊かに広げ、地域とアートを結びつけて考えていくこと、それこそがこれから北海道におけるアートの社会性や公共性を育てていくことになるだろう。テーマを象徴する中谷宇吉郎、美二子の作品をはじめ、作品群そのものは北海道らしさに満たされて、充実していたと思う。

ところで北海道には、これまで継続して展覧会などを開催しているいくつかの地域のプロジェクトがある。先述の夕張や北見の今回の企画もその例で、地域とその周辺在住の作家などが中心となって実施している。その他、苫小牧には金属彫刻家藤沢レオを代表とする創作家集団「樽前 ARTY」があり、2004年から美術展を開催している。活動の一環として地元小学校の運動会場の設営なども協力するうち、地域から応援されるようになったという。その後さまざまに地域との協働で活動、昨年市内に苫小牧市美術博物館がオープンしてからは、さらに同館との協働も増え、現在まで出前授業、ワークショップなどアートを通じ、地域と関わっている。

また白老町には、1986年に廃校となった旧飛生(とびう)小学校校舎を、2002年より美術家たちが共同アトリエとして運営している「飛生アートコミュ

ニティー」がある。野趣溢れる裏地の森も展示空間として切り拓き、2009年からここで「飛生芸術祭」を開催している。6回目の今年は夕張などと同様札幌の芸術祭の連携事業として開催(9月7日～12日)された。飛生の森と呼ぶ屋外での展覧会に加え、TOBIU CAMPと名づけた野外コンサートなども毎年行う。道内若手作家が参加する主会場の森は、入口のアーチや広場、ツリーハウスなど森そのものが作品で、2015年の完成を目指す。他作品は木々を利用したインスタレーションが主体だが、初回から各所に設置されている作品はほどよく風化の彩りをまとい、新規の彫刻作品もまじえて、充実した空間の展覧会である。ここでコミュニティー代表の彫刻家国松希根太は、地域との関係の構築に心を砕いてきた。当初は、自分たちの創りあげる企画について、地域の人々の理解を求めようと活動してきた。しかし数年前から、アートを伝えることは果たして必要なのか、疑問を感じ始めた。そんな折、昨年敷地内にコミュニティーの象徴としてのトーテムポールを制作し設置するため、什器手配や人員など地域の人々に協力を頼ると、これまでになく喜んで援助してくれたという。作家たちがどうしても表現したいこ

との内容やアートの意味を伝えることよりも、その実現のために助けてほしい、という態度のほうが、共感してもらえたことかというのだ。もちろんこれまでの交流も礎にあると思うが、アートをどうしたら地域に理解してもらおうか、という、ある種のくびきから解かれるように感じられる。

この場所で、さらにコミュニティーと地域のつながりを考えさせる出来事が、この夏起こった。白老町は9月10日未明、集中豪雨に見舞われた。飛生川が氾濫、国道につながる町道が1キロ以上にわたって水没。幸い死者はなかったが、近隣のキノコ工場従業員などおよそ70人が1日孤立した。このアートコミュニティーは、避難所である福祉館に隣接していた。校舎内にカフェがあり、食料の備蓄がある。国松は孤立した人々をカフェに誘導し、食事を提供した。大きく報道されなかったが、先述の地域とのかかわりの経緯とあわせて考えると、アートと地域をつなぐ、ひとつの貴重なありようを示しているように思われる。それは、企画や展示の方法論ではなく、地域と関わろうとする人間としての接し方、態度や姿勢の問題に、純粹に集約されるものではないだろう。



飛生芸術祭 2014 《TUPIU HOUSE》
飛生の森 飛生アートコミュニティー



札幌国際芸術祭 2014 中谷美二子 (FOGSCAPE #47412)
札幌芸術の森美術館

場所を継ぐ

原田久美子 (はらだくみこ・秋田県立美術館)

東北では、夏から動物がうごめいていた。本間美術館の「美術館の動物たち」展(7月31日～9月16日)を皮切りに、岩手県立美術館は「三沢厚彦 ANIMALS 2014 in 岩手」展(9月6日～10月13日)、秋田県立美術館は「藤田嗣治 どうぶつものがたり」展(9月20日～11月4日)、秋田県立近代美術館では「猫まみれ展」(9月21日～11月24日)が開催された。地上に共生する動物に焦点をあてる企画が続いたのは、震災後の心情と無縁ではないだろう。

自館の紹介をさせていただくと、秋田県立美術館は昨年、新築の建物に移転し、今年9月28日でリニューアル1周年を迎えた。当館は1967年、秋田市の美術品収集家・平野政吉のコレクションを展覧するために開館した美術館である。このコレクションの核となるのが1930年代の藤田嗣治の作品であるが、とくに壁画《秋田の行事》(1937年)は、当時の国土の表象といえる大作である。移転が契機となって、《秋田の行事》の存在が知られるようになり、来館者が急増した。秋田という場所をテーマにしながら日本人の普遍的な営為を表現した壁画が、人々を惹きつけている。

アートプロジェクト花盛りの昨今、全国的にさまざまな取り組みが進行しているが、秋田県の「KAMIKOANI プロジェクト 秋田」(8月9日～10月13日)を報告したい。秋田県の内陸、人口2,500人ほどの上小阿仁村を舞台とする本プロジェクトは、2012年に「第5回大地の芸術祭 新潟県

越後妻有アートトリエンナーレ 2012」と連携して同村八木沢集落で開催され、本年で3回目。66日間の会期中、約17,000人が、この小さな村を訪れた。ディレクターは、金沢美術工芸大学准教授芝山昌也氏。芝山氏が秋田公立美術大学在職中に立ち上げた。今年は、八木沢を含む村内3集落の田畑、橋、廃校などに日本と台湾の現代アーティスト28名の作品を展示、また民俗芸能を上演、絶えていた伝統行事を復活させた。民俗芸能や伝統行事の造形には、集団の想像力が凝縮している。名称に「アート」を冠していないことからわかるように、このプロジェクトは、場所そのものを意識した取り組みである。筆者はクロージグに訪れたが、山に囲まれた風景と、人々の記憶が染み込んだ廃校が、それぞれのアート作品に強靱な存在感を与えていた。クロージグイベントの伝統行事「万灯火(まるとび)」では、彼岸と此岸の間を照らす灯火が集落の道に連なった。メイン会場となった八木沢は、10世帯ほどの限界集落である。このプロジェクトは、地域の活性化を図りながらも、一つの集落の終焉の予感を孕んで進行している。他のアートプロジェクトと異なる点である。「今年も一つ家屋が取り壊された。寂しくなる集落と寄り添い、日本の未来を考える事も、プロジェクトの大切な役割だ」と芝山氏は話す。関わったアーティストたちの今後の表現に、集落の記憶を託したい。

リアス・アーク美術館が4月、新しい常設展「東日本大震災と津波の災害史」(4月3日～)を開展

した。震災より1年半の間、全面休館した同館は、段階的に活動を再開、この新常設展で完全開館した。「依然として震災の只中にある」気仙沼市と南三陸町において、震災を後世に伝えようと、学芸員が被災現場で撮影した写真、収集した被災物、歴史資料等を展示している。この常設展を踏まえて、9月から同館は、震災の美術表現の可能性を問う特別展「震災と表現 BOX ART 共有するためのメタファー」(9月17日～11月3日)を開催した。開館から20周年、震災からは3年目という節目にあたり、社会現象としての震災の多義性を、ボックス・アートの手法による作品の展観で検証しようという実験的な企画である。これまで同館で個展を開催したアーティストや、震災後につなかりのできた作家たちの作品約45点が展示された。「リアス・アーク」とは「リアスの方舟」を意味し、ノアの方舟を模して山の上に建設されたという。「消

えゆく地域の民俗・文化を来るべき再生のときの為に遺す場として当館は誕生した。2011年の震災によって想定はまさに現実となった。当館は、失われた、あるいは失われゆく記憶を再生するための『モノ』を遺す『ハコ』なのである」と、「震災と表現」展において同館は宣言する。震災と場所、そして美術表現との連環を問う意欲的な試みであった。

青森県立美術館では、「あなたの肖像―工藤哲巳回顧展」(4月12日～6月8日)が開催された。2013年秋より大阪、東京と、工藤ゆかりの場所を巡回した展覧会であったが、同館は、青森県五所川原市出身の画家であった父・工藤正義の作品を常設展示室に展示し、戦後美術の重要な作家として再評価が進む中、工藤哲巳が少年期を過ごした津軽、そして縄文文化からの影響にも着目していた。場所が作品の中に生き続けていく。そのことにも思いが至る展覧会であった。



「KAMIKOANI プロジェクト 秋田」八木沢集落の棚田に展示された作品



ノアの方舟を模して山の上に建てられたリアス・アーク美術館

遊びと美術館

小泉淳一（こいずみ じゆんいち・茨城県近代美術館）



「真夏の遊園地」というサブタイトルに惹かれて、栃木県立美術館で開催していたタムラサトル（筑波大学出身）の個展に行ってきた（7月12日～9月23日）。というも、ただ提示された作品を見て、鑑賞するという受け身の展覧会のあり方になんとか限界を感じるところがあって、もっと鑑賞者が積極的に作品と関われる可能性はないものかと考えていたのである。つまり、美術館が遊び場となり、そのことによって展覧会が成立する、そういう企画があってもいいのではないかと思ったわけであり、チラシを見る限りタムラの作品は確かに「遊園地」の名にふさわしく見えた。

しかしながら、これは私の大いなる勘違いであった。巨大なクマの造形物も、カラフルなワニの作品も、鑑賞者の意図とは無関係に勝手気ままに機械仕掛けで動けばかりであり、見る人がその企てに参加する部分は全くない。もちろん遊園地の乗り物のようにそこに乗れるわけでもない。「遊園地」とはいえ、やはり本物とは違うのだから当たり前というべきだろうが、夏休みにあの副題を掲げて、動物の造形物の写真を使ったら、私のように思う人がいても不思議はないだろう。私が見ていた時にも、いく組かの親子づれが会場にいたけれども、特に肩すかしされた風情もなく、ごく当然といったように展示を楽しんでいるようではあった。やはり美術鑑賞とはそうしたもののなのだろうか。

作品の方は、多くが電気の方で機械的に動くのだが、そのことによって何かを語っているのかと

探ってみても、ことさらに何かに至るようでもない。生来、物惜しりするたちで、つまりはけちん坊の私にしてみれば、エネルギーのムダ使いだと、正直あまり快くは感じなかったのだが、展覧会図録に山本氏が書いているテキストを読むと、それがまさにこの作家の意図するところのようであった。

「電化装置の後景に佇む空虚な内実はいつまでも意味を充実しないことによってこそ見るものの心をつかみ続けるのである。芸術という空虚が安直に意味を持ってしまうことの虚構をタムラは鋭く突いている。」（「タムラサトル—人間と機械のしなやかな関係について」山本和弘、同展図録）

芸術の意味の不確かさは、常日頃感じるところであるし、しかしその価値の上でしか、作家も鑑賞者も、さらには解説者としての私たちも、その存在意義を保証するものがないという現実を考えれば、その空虚さの証明とは何ともやりきれないことであるし、できれば伏せておきたい事実なのかもしれない。私の不快感の本当のところはこのことによったのかもしれない。

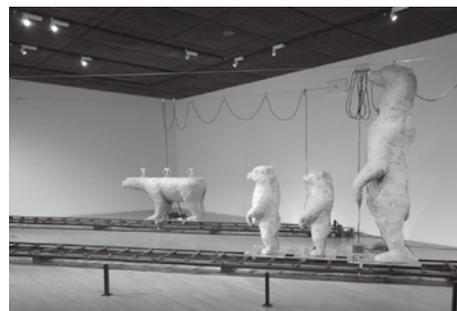
芸術と科学における有用性と非有用性という山本氏の論の展開も興味深く、「遊び」というテーマからしても関連が深くおもしろかったが、展示の受身形はやはり、「遊び」とはかけ離れた印象があった。美術鑑賞自体がそもそも「遊び」なのかどうかという点も大きな問題だが、何か違う感じが否めない。ホイジンガやカイヨワといった“遊び”の歴史的研究を見てもどうも曖昧である。一筋縄ではい

かない“遊び”論に首を突っ込む余裕もないから、ここでは主体的に関わる参加型の展示をとりあえずは“遊び”としてイメージしておくことにしたいと思うが、そういった意味では、その日の帰りに立ち寄ったうつつのみや妖精ミュージアムにおける八木良太 個展（7月21日～9月15日）は、各作品が、それぞれ観客に参加を促すものであったから、“遊び”の感覚が満載であった。

そう言えば、常に最先端の現代美術を紹介してきた我がお隣りの水戸芸術館現代美術センターでの企画は、けっこう参加型の展示が多いようであり、「近所の地球」と銘打った鈴木康広の個展でも（8月2日～10月19日）、開いた目と閉じた目が裏表に描かれた木の葉のような紙を部屋の中央に設置された塔に入れるとそのてっぺんから紙が吹き出され、部屋中にまき散らされると回転しながら舞い落ちてくる

という作品があって、観賞者を楽しませていた。観賞者を作品に巻き込む作品はわりあい現代美術にはなじみがあるようである。これは、“遊び”の精神がそもそも“現代”的ということを示すのだろうか。

さて、当館でも「ワカラナイノススメⅡ」（11月1日～12月14日）という、観賞者参加型の展覧会を去年に引き続いて開催した。キャプションに覆いをして、作品だけ見てもらって、いろいろ感じたことを書いてもらったり、語りあう会を開いて、展覧会を遊ぼうという企画である。ただたんに美術を鑑賞することといったところが違うのか、正直それ自体「ワカラナイ」部分もあるのだが、「参加感」があるかないかの差は確かにあるようである。去年は入場者数的には少なかったが、来て参加した方には大変評判がよく、またやって欲しいとの言葉を大分いただいたが、はたして今年はどうだろうか。



「タムラサトル《真夏の遊園地》展より
タムラサトル《Standing Bears Go Back》2002年



「ワカラナイノススメ」展で作品について話し合う子どもたち

「エンナーレ」の時代と東京オリンピック

富田 章 (とみた あきら・東京ステーションギャラリー)



日本各地でビエンナーレやトリエンナーレ、あるいは芸術祭が盛んである。今年に限っても横浜をはじめ、札幌、山形、中房総、琵琶湖、京都、六甲、西宮船坂、福岡、大分の国東半島などで開催されている。ほかにも愛知や瀬戸内、越後妻有、新潟、別府、神戸、群馬の中之条など、枚挙に暇がない。青森や埼玉、京都でも始まるという。開催の主体や形態はさまざまであるが、これらを総称してここでは仮に「エンナーレ」と呼んでおこう。

この「エンナーレ」の隆盛は何か似ている、と感じるのは私だけではないだろう。かつて、日本各地に公立私立を問わず美術館が次々と建設された時代があった。80年代から90年代にかけて、日本の景気がまだ上向きだった時のことである。その後多くの美術館が、景気の後退や首長の交代によって予算が大幅に削られ、あるいは指定管理者制度が導入されるなどして、閉館を含めた無残な状況に追い込まれていった。地方自治体の支援を受け、あるいは企業の協賛によって成り立っている「エンナーレ」の流行がその姿に重なるのである。

揶揄しているのではない。危惧しているのだ。

多くの「エンナーレ」が、海外や日本の優れた現代アートを体験する機会を作り出し、地元作家や新人作家たちに発表の機会を与え、また、現代アートに無関心だった人々を惹きつけ、新しい観客層を掘り起こしていることは高く評価されるし、この流れが続いて欲しいと思う。そう願いつつも、一抹の不安を禁じ得ないのだ。今後、行政や企業

の支援が得られなくなったときに、せっかく育ってきた土壌が不毛なものに変質してしまうことを恐れる。箱がない分、撤退はさらに容易だ。企画者には、そうなるも持ちこたえられるような体制を構築していただくことを期待するばかりである。

ひるがえって東京は、こうした地域全体をまきこむ大規模な「エンナーレ」との親和性はあまりない。それはいま隆盛を極めつつある「エンナーレ」が、地域活性化と不可分に結びついているからだ。東京は活性化をするまでもないということなのだろう。各地で「エンナーレ」が活発化するのを尻目に、この夏から秋にかけて東京では例によって大規模な展覧会が次々と開かれた。「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」(東京国立博物館、6月24日～9月15日)、「オルセー美術館展」(国立新美術館、7月9日～10月20日)、「チューリヒ美術館展」(国立新美術館、9月25日～12月15日)、「ウフィツィ美術館展」(東京都美術館、10月11日～12月14日)など、いずれも国家補償制度の対象となりうるような大型展である。そうかと思えば、「バルテュス展」(東京都美術館、4月19日～6月22日)、「ヴァロトソン—冷たい炎の画家—」(三菱一号館美術館、6月14日～9月23日)、「フェルディナント・ホドラー展」(国立西洋美術館、10月7日～2015年1月12日)、「ウィレム・デ・クーニング展」(ブリヂストン美術館、10月8日～2015年1月12日)、「ジャン・フォートリエ展」(東京ステーションギャラリー、5月24日～7月13日)など、個性的で魅力的な

作家の展覧会が次々と開催されるのも東京ならではのことである。

日本美術でも「日本国宝展」(東京国立博物館、10月15日～12月7日)、「菱田春草展」(東京国立近代美術館、9月23日～11月3日)などの大規模な展覧会から、「徒然草—美術で楽しむ古典文学」(サントリー美術館、6月11日～7月21日)、「超絶技巧! 明治工芸の粋」(三井記念美術館、4月19日～7月13日)、「没後90年 鉄斎 TESSAI」(出光美術館、6月14日～8月3日)、「鬼才の画人 谷中安規展」(町田市立国際版画美術館、10月4日～11月24日)など多様な展覧会が並び、現代アートについても「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展」(東京国立近代美術館、6月20日～8月24日)、「フィオナ・タン」(東京都写真美術館、7月19日～9月23日)、「リー・ミンウェイとその関係」(森美術館、9月20日～2015年1月4日)など、力のこもった企画が続いた。

そうした中で興味深かったのは、1970年代に焦点を当てた展覧会が重なったことだ。練馬区立美術館での「あしたのジョー、の時代展」(7月20日～9月21日)は、身体性という切り口から土方巽とジョーや力石徹の肉体を重ね合わせると、鋭い視点が際立つ展覧会だった。手前味噌ながら当館でも「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン展」(9月13日～11月9日)で、国鉄時代の伝説的キャンペーン

とそれにまつわる状況を取り上げた。また東京国立近代美術館の小企画として実施された「美術と印刷物 1960—70年代を中心に」(6月7日～11月3日)も、地味ながら非常に見応えがあった。美術が物質性からコンセプチュアルな表現へと転回していく時期に、印刷物が美術とどう関係していたかということを検証し、更なる思索を促す好企画だった。

さて、2020年に東京オリンピックが招致されることに決まった。スポーツだから美術とは関係ないということにはなりそうにない。オリンピックをめぐるさまざまな動きが始まっており、そのいくつかは確実に美術や美術館に影響を与えそうである。

すでに東京都は、都内各館へのアンケート調査を実施するなど、2020年に向けた文化的取り組みへの対応を始めている。2020年を意識した展覧会企画を模索している館もあることだろう。「エンナーレ」と違って、1回きりの機会であるが、オリンピックのためだけのお祭り騒ぎにしてしまつては不毛に過ぎる。オリンピックを奇貨として、先につながるような試みを行うことができれば、実りある機会となることだろう。

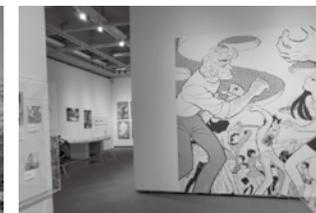
もうひとつ、東京ブロックの話題として触れておきたいのは、東京都庭園美術館のリニューアルオープン(11月22日)である。新たな展示スペースができたことで、アール・デコの名建築であるがゆえの展示の不自由さが大いに改善されるであろう。今後の活動に期待したい。



東京都庭園美術館本館



東京都庭園美術館新館



「あしたのジョー、の時代」展展示風景

今日の美術館事情

横山秀樹（よこやまひでき・新潟市新津美術館）



富山県立近代美術館で開催された、「成田亨 美術／特撮／怪獣 ウルトラマン創造の原点」（7月19日～8月31日）は、これまでの美術展や特撮物の展覧会とは異なった様相を示していた。

成田亨は彫刻家であるが、その名前は「ウルトラQ」「ウルトラマン」「ウルトラセブン」のウルトラ怪獣のデザイナーとしてよく知られている。西洋近代美術を学んだ成田は、当時の前衛表現に違和感を覚え、円谷特技プロダクション（現・円谷プロダクション）に請われ、「ウルトラQ」から特技美術監督として参加した。

彫刻家としての造形感覚と創造性を発揮し、怪獣たちや車、飛行機などのメカニックなどのデザインを行った。展覧会の会場には、1950年代の初期作品から「ウルトラQ」「ウルトラマン」「ウルトラセブン」「モンスター大図鑑」など、1990年代にいたるまでの作品約700点が、遺族の全面的協力により所せましと展示された。

ここでは、青森県立美術館の所蔵品となっているウルトラ怪獣のデザイン原画を始め、彫刻・絵画作品や未公開の怪獣原画、成田考案の特殊撮影セットの再現など、多彩な能力を発揮した成田亨の作品が紹介された。

あまりの作品数の多さに、一つ一つを憶えきれなかったが、これだけの回顧展は以後開催されることはないと思われ、その意味では貴重な展覧会であった。入場者も23,685人を数え、多くの成田ファンが全国から集まり、5,400円の高額な図録も

話題を呼んだ。

成田亨は「ウルトラセブン」の終盤に、次のシリーズをめぐって監督などと意見の相違があり中途降板する。成田にとって「ウルトラマン」や怪獣をデザインしたのは自分であって、無駄がなく均整のとれた造形美を備えた芸術作品「ウルトラマン」は最高傑作としての自負があった。

「ウルトラマン」は、円谷監督はじめ多くの関係者が検討を重ね、その意見を参考に成田亨が制作したデザイン画を、佐々木明が粘土で立体化し、そこに成田が手を加えて完成させたものだった。変身して飛び出して来るポーズや飛んでいるポーズなどの人形、マスクの制作を行ったのは佐々木であり、「ウルトラマン」は円谷プロのテレビ特撮のヒーローとして存在していた。

成田がこだわった「ウルトラマン」は、後のウルトラシリーズのなかで主人公が交代するたびに様々な要素が加わり姿が変化していった。「ウルトラセブン」以後に展開されたウルトラの新ヒーローたちは、成田にとっては耐え難い全く異次元のものであった。

新潟市新津美術館では、平成23年に「ウルトラマン創世紀展」を開催した。この展覧会は、「ウルトラQ」の誕生から「ウルトラマン80」までの、「ウルトラシリーズ」を企画した展覧会であった。デザイン画、立体造形、台本、撮影用小道具などテレビ撮影に用いられた様々な作品類が集められ、総点数は1,000点を超えるもので、全国から集まっ

た34,093人の入場者を記録したが、成田亨のウルトラマンをはじめとする怪獣等のデザイン画は、一切出品されることはなかった。

一方、「成田亨展」には、「ウルトラシリーズ」に関する造形作品等は展示されず、成田が制作した油絵や怪獣デザイン画が展示された。富山県と新潟県で「ウルトラシリーズ」の原点となる展覧会が開催されたことにより、はじめて全貌が明らかになった。

新潟県立万代島美術館で開催された「近藤喜文展」（7月4日～8月31日）は、新潟県五泉市出身のジブリのアニメーターで、48歳で急逝した近藤喜文が描いたキャラクター・デザインやアニメーション原画、イメージボード、スケッチなどを展示した展覧会であった。新潟だけの単独開催であったこともあり、全国から近藤ファンが集まった。

新潟市マンガ・アニメ情報館で開催した「エヴァンゲリオン展」（2月15日～4月20日）は、65日間の長期の開催で26,082人の入場を記録した。

今、マンガやアニメの展覧会を開催すると、多くの入場者を見込めることも特色の一つである。

観客層も、「成田亨 美術／特撮／怪獣 ウルト

ラマン創造の原点」、「ウルトラマン創世紀展」は20代から70代まで幅広い男性客が主流であり、「近藤喜文展」は20代から50代の女性客、「エヴァンゲリオン展」は10代の中高校生から40代の若い男女が主流であった。

新潟県内の2014年度上半期の展覧会のなかでは、新潟県立近代美術館での「生誕120年 宮芳平展」（4月26日～6月1日）が2,283人、「法隆寺展」（7月5日～8月17日）が39,038人、新潟県立万代島美術館での「国立国際美術館コレクション 美術の冒険」（5月17日～6月22日）が4,956人、前述の「近藤喜文展」が57,958人。新潟市美術館の「洲之内徹と現代画廊展」（4月12日～6月8日）が4,060人、「荒木経惟写真展」（8月9日～10月5日）が8,496人、新潟市新津美術館での「川島小鳥写真展」（4月19日～6月1日）が13,172人、「チェブラーシカとロシア・アニメーションの作家たち」（6月14日～8月17日）が10,722人の入場者を記録した。展覧会の質と内容は別として、4館の入場者を見てみるだけでも、今日の一般の人たちがどのような展覧会に足を運んでいるのか、傾向が見えてくるようである。



富山県立近代美術館「成田亨 美術／特撮／怪獣 ウルトラマン創造の原点」会場風景

写真の展示と展覧会

—受容のいま

正村美里 (しょうむら みさと・岐阜県現代陶芸美術館)



東海圏の平成 26 年度上半期、偶然なのか、時代の色というべきなのか、様々なかたちでの写真の展示が各所で行われ話題を集めた。

展覧会に作品としての写真が含まれるのは、今や日常茶飯のことである。写真の個展、グループ展、芸術写真と呼ばれる類、その反対に資料的役割としての写真、記録写真、そして現代美術の一手法として用いられる写真。多様な顔をもって現れる写真は、表現そのものなのか単なるメディアムなのか、その境界も曖昧なままに、急速なデジタル化によって様相をさらに拡散させつつ、美術展に占める割合を確実に広げている。この上半期は、写真の存在を強く意識させる展覧会がいくつも開催された。

豊田市美術館では、写真家の個展としては王道ともいえる、「荒木経惟 往生写真集一顔・空景・道」展が開催された(2014年4月22日～6月29日)。“アラキー”が撮り続けてきた人と日常。切り取られた時間のざらついた空気が哀しみとともにまわりつく、まさに写真のもつ力そのものが訴えてくる展覧会である。本展はサブタイトルと作品を変えて生きた展示として新潟市美術館、資生堂ギャラリーへと巡回している。

静岡県立美術館では、「没後百年 日本写真の開拓者 岡蓮杖展」が開催され(6月10日～7月21日)、幕末に生まれた狩野派の絵師で、外国人写真師から機材と写場を受け継いだ下岡を日本の写真開祖のひとりとして紹介した。

名古屋市美術館では、高橋コレクションによる

「マインドフルネス！」(4月12日～6月8日)と、台湾のヤゲオ財団コレクションによる「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展」(9月6日～10月26日)の2本の現代美術コレクション展が開かれたが、前者には蜷川実花、島山直哉、やなぎみわ、後者には杉本博司、アンドレアス・グルスキーといった、現代美術展の常連ともいえる写真家の作品が含まれており、美術品として仕分けられるコレクターの眼が示されていた。

岐阜県関市にある岐阜現代美術館では、「桂川 成美 boundary 境界」展が開催された(8月1日～9月30日)。写真をベースに作られた桂川の作品は、日常生活でスナップされた都市の風景に省略やコラージュといった加工を施すことによって現実感をブリーチアウトし、むしろ写真からは遠ざかって版画の領域を示している。

三重県立美術館の「カミノノクマノ一聖なる場所へ」展(9月20日～11月24日)では、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録10周年記念として4名と1グループが熊野をテーマにそれぞれ写真、油彩、鉛筆画、映像、立体を制作、展示した。城戸保の写真は、期待されるような熊野の神聖さをあえて避け、錆び付いたトタンや塗装の落ちた壁といった人と時間の痕跡を乾いた色で写し撮り、「世界遺産」と過ぎ去った日常との距離を測る。水野勝規の映像はのどかな集落や、田園風景、浜辺といった当たり前の風景を切り取り、動画と静止画を組合せて展示する。静止画の、写真

になり得るが常に動画でもあるというアンビバレントな特性は、写真の境界をいっそう曖昧にする。

そして、こうした美術に溢れる写真の存在について見る側に整理を促したのが、「これからの写真」展である(愛知県美術館、8月1日～9月28日)。写真が他の美術のメディアムと同じ土壌で語られる今、東海圏の中心であえて「写真」というタイトルを掲げて展覧会が行われることに期待を寄せていたところ、思いがけず「猥褻物陳列」などという主催者の意図からかけ離れた話題によって大きく注目を浴びることとなった。主催者と作家によりスムーズな処置が施されたものの、メディアやネット上では「裸体は芸術か否か」という120年前に起こった「裸体画論争」の写真版の様相を呈した。

しかし本展は元来、「多義性」をキーワードに、写真という概念を曖昧さ、ズレ、混交性といった可塑性のあるものとして捉えようと試みたものであった。定義を超えて写真にまつわる美術作品を集め、美術における写真の現況と、そして改めて「写真」とうたうことの意味を考える場を設けようとした。新井卓、加納俊輔、川内倫子、木村友紀、鈴

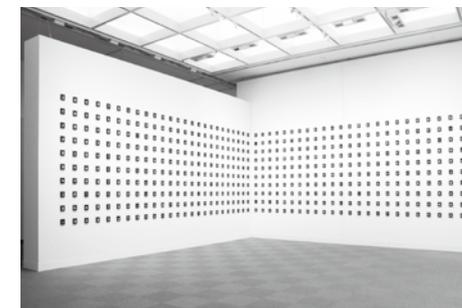
木崇、鷹野隆大、田代一倫、田村友一郎、島山直哉の9名の写真とインスタレーションは、図録のテキストで丁寧に進められた1960年代以降の美術写真の受容史と併せて、写真の概念が変容し膨張し続ける過程として提示された。

別室では「日本の写真史を飾った写真家の『私の1枚』—フジフィルム・フォトコレクションによる—」展が併催され(8月1日～9月28日)、「これから～」展には示されていない、現在までの芸術写真史を補完した。幕末から20世紀末までの写真家101名の「私の1枚」は、著名な写真家の、一度は見たことのある代表作をサイズもコンパクトにまとめており、こちらを写真史入門編、「これからの～」展を応用編、あるいは前者を写真道編、後者をコンテンポラリー・アート編といってもよい、縦軸と横軸の切り口を楽しむことができた。

東京都写真美術館がスタートしたのは1990年。日本において写真が美術としての居場所を確保した大きな一歩と位置づけられるが、その後四半世紀を経て、中部圏における写真の受容のいまを各所で知り得た半年だった。



三重県立美術館「カミノノクマノ一聖なる場所へ」展
城戸保作品展示風景



愛知県美術館「これからの写真」展 鈴木崇《BAU》作品展示風景
Courtesy of the artist

所感を織り交ぜて

篠 雅廣 (しのまさひろ・大阪市立美術館)



私事ながら世の中へ出て 28 年、日本海側に所在する美術館に学芸員として勤めはじめたころは、各地でミュージアム（あえてそう呼ぶ）が雨後の筍ほどたくさん生まれていた。当時の某紙は「日本では 3 日に 1 館のペースで博物館や美術館が設立され、人類文化史上かつてないこと」と報道していたほど。一方では、扱いに腐心していたものか、「70 年代は建設の時代、80 年代は運営の時代、90 年代は経営の時代」とも叫ばれ、「そういう時代のなかで自分は仕事をするのか」と妙に得心していたのだが、今になって、「では、あれからいったいなか変ったことはあったのだろうか」と思いかえせば、どこかザラリとしたものを食べてしまった後味ばかりが残る。

「運営」も「経営」も外国語にすれば同じ単語にしかならないし、実務での使い分けと効果の吟味に着手する前に、「ガバナンス」（首長や議会だけが行使できるのでは？）や「マネジメント」、「オペレーション」なる用語がお手軽に使われ、さらには市民や利用者を、ごく経済的な利害関係しか意味しない「ステークホルダー」と見なすところまで来た。そうなるミュージアムは、どこか機能性、資金回収マシンとして、あるいは集客装置としてのみ一義的に評価されてしまい、ミュージアムがミュージアムたる由縁を保障する国内諸法と ICOM の倫理規定の遵守、設置主体の設立趣旨からどんどん離れてしまう。

全国的にみても、江戸時代と変わらぬ出開帳

や到来物で賑わう「催事」が可能なミュージアムは、後背人口の多寡や立地条件などから数は限られている。だから皆がおなじ金太郎飴のような姿かたちを目指すべきではない。設立の趣旨、設置主体の意志、立地条件や建物の構造、歴史的経緯などそれぞれのミュージアムを背後から支えている諸事情をよく踏まえて「経営」すべきだ。

ミュージアムの経営とは利潤を生むことではなく、国公立、民間を問わず策定した文化政策や振興プラン、また経営理念の妥当性、さらには現実との齟齬の有無を、収集・保存・公開などミュージアムの具体的な機能で試してみることに尽きる。さらには、展覧会への入館者数に加えて、ワークショップ、講座、ギャラリートーク、出前教室などミュージアムが提供するさまざまなプログラムに参加した人びともミュージアムの利用者としてカウントすべきだろう。

閑話休題。近畿の動向であるが、京都国立博物館に館藏品と寄託品を展示する平常展のための新館として「平成知新館」が 5 年の工事期間を経てリニューアルオープンした。設計した谷

口吉生は、既存の明治古都館との調和をはかりながら、東山のスカイラインを壊すことなく景観に配慮して、いつもながら端正に仕上げている。国宝 62 点と重要文化財 122 点を核としたオープンの記念展「京へのいざない」（9 月 13 日～11 月 16 日）は、展示作品の大半が京都で制作されたものであり、博物館自体が 1200 有余年の歴史に連なっていることを視覚的に示して興味深い展観であった。「ズラリ国宝、ずらり重文。」のキャッチコピーも秀逸。

また、和歌山県立近代美術館の「没後 50 年 野長瀬晩花」（9 月 13 日～12 月 7 日）は、最新の調査研究の成果をふまえた堅実な展覧会であった。この美術館は、2012 年の「没後 70 年 建島大夢」、「生誕 120 年 川口軌外」、2013 年には「生誕 120 年記念 石垣栄太郎」など、アニバーサリーな時宜を見すえながら、画家と作品の再解釈を絶えず加えている。先日も、某学会で石垣栄太郎展を担当した学芸員が丁寧な資料紹介をしていたが、ミュージアムの本旨を外すことのない地道な活動はもって評価されるべきであろう。



京都国立博物館外観（正面左側が「平成知新館」） 撮影：北嶋俊治



野長瀬晩花《三味線を弾く女》1919 年頃
和歌山県立近代美術館蔵

2014 年秋・島根彫刻展めぐり

川西由里 (かわにし ゆり・島根県立石見美術館)



2014 年の秋、島根県内で近現代の彫刻家の個展を相次いで観る機会に恵まれた。

安来市の和鋼博物館では「米原雲海彫刻展」が開催された(9月18日～10月20日)。1869年に安来に生まれた米原雲海は、郷里で宮大工として修行した後、彫刻家を志して上京し、高村光雲に師事した。1899年の《ジェンナー像》制作にあたり、西洋彫刻の手法である比例コンパスを初めて木彫に導入したことで知られ、また国内外の博覧会に出品を重ねた雲海は、日本に「彫刻」という概念が定着する過程に立ち会った人物の一人である。会場には、地元に残る少年時代の習作から、東京藝術大学所蔵の《善那木型》(東京国立博物館《ジェンナー像》の原型)や《橋本雅邦像》といった等身大の肖像、長野の善光寺の仁王像原型、橋本雅邦に学んだ頃の絵画資料などが集い、現存作品が極めて少ない作家の足跡をたどろうとする企画者の努力が感じられた。最も多く見られたのが像高30～40センチ程度の人物像で、中には原型と同じくする石膏、木彫、ブロンズ像が並べられたものもあった。このことは、雲海が個人宅で「置物」として受容されていたことを示す。雲海の制作には、肖像彫刻や仏像といった公的な需要と、文展や帝展といった場で発表した「美術作品」、そして私的な空間に飾られる「置物」が少しずつ重なりながら混在する。その様子から、「彫刻とはいかにあるべきか」という美学的な問題と、「社会は彫刻家に何を求めているか」という現実的な問題の狭間

にあった彫刻家の姿が立ち上ってきた。

島根県立美術館(松江市)では日本における抽象彫刻の先駆者、植木茂の回顧展「生誕100年 植木茂 木の歌を聴く」が開催された(9月12日～11月3日)。戦後間もない1940～50年代の木彫やデッサンから始まり、60年代に手がけた鉄の作品、デザインの仕事、そして晩年70～80年代の木彫という4部構成で、作家の全貌が示された。現代彫刻の展覧会、それも抽象彫刻となると一般の方にはとっつきにくいのでは……という思いが頭をよぎったが、有機的なフォルムの作品が並ぶ展示室は、訪れた人を和やかにする居心地のよい空間だった。本展で注目されたのは、彫刻作品以外に家具や照明器具、アクセサリ、ガラス器といったデザインの仕事が紹介されたことだ。展覧会図録には、彫刻家ではなく空間デザイナーでありたいと考えていた植木の言葉が引用されている。食卓のウイスキー瓶から、屋外のモニュメントまで、暮らしの様々な場面をいろどった植木の仕事は、戦後の社会において、美術家が人々の暮らしに関わるかを探求し続けた成果である。

島根県立石見美術館(益田市)では「藪内佐斗司彫刻展 いのちをむすぶ童子たち」が開催された(10月4日～11月17日)。こちらは、初期から最新作までの彫刻作品、仏像など文化財修復の仕事、そして藪内が率いる仮面舞踏集団「平成伎楽団」の紹介という3部構成。生命の器としての身体を表現した鎧のシリーズや、反復する形で動

物の動きを表したシリーズなど、美術館等に収蔵されている大型作品がある一方、点数として多くを占めたのは個人や企業が所蔵する「置物」サイズの作品だった。その多くは、愛らしい男児が龍や虎に乗ったり、太陽や雲と戯れたりする「童子」のシリーズだ。吉祥や生命力の象徴として制作される童子は、ひと目でそれと分かる風貌を持つ、いわば藪内が生んだ「キャラクター」である。また、大空間を用いたインスタレーションにより本展の大きな見どころとなった「平成伎楽団」は、キャラクターの群像劇とも捉えられる。奈良県マスコットキャラクター「せんとかん」のデザイナーとして知られている藪内は、今や日本文化の特徴となった「キャラ文化」に、極めて親和性の高い作家といえよう。

ところで島根県には藪内の屋外彫刻が点在しており、中でも島根県立美術館の《宍道湖うさぎ》は、前から二番目の像にシジミを供えると恋愛が成就

するという都市伝説で一躍有名になった。またJR松江駅前の一畑百貨店には三つの出入りに藪内の童子像が設置され、「ラッキースポット」としてPRされている。藪内の作品がこうした感覚をよびますのは、「彫刻」が登場する以前から日本人が神仏や動物をかたどった「置物」に親しみ、その中に人格(キャラクター)を読み込んできたからではないだろうか。

近現代の彫刻展は、輸送展示にかかる経費や労力に比べ集客力がいまひとつ、という話をよくきかれる。しかしこのたび近代、戦後、そして現代の彫刻家の活動を回顧する機会を得、社会と美術家との関わりを考えるにはとても面白い場だと改めて感じた。アプローチや空間構成に工夫をこらした彫刻展により、彫刻展こそ美術館の醍醐味、というファンが増えることを期待したい。企画する方は大変だけれども。



「生誕100年 植木茂 木の歌を聴く」会場風景



「藪内佐斗司彫刻展 いのちをむすぶ童子たち」会場風景

四国の美術館概況

松村 円 (まつむら まどか・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)



美術館の台所事情はどれも厳しいながら、四国の各館も工夫を凝らして活発な事業展開をしている。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では「あそびのつくりかた」(3月1日～6月1日)、「拡張するファッション」(6月14日～9月23日)を開催した。「拡張するファッション」展は、水戸芸術館との巡回で、林央子の著書『拡張するファッション』(スペースシャワーネットワーク、2011年)を元にした、ファッションについての従来の概念を拡張する斬新な内容である。当館では写真、インディペンデント出版活動、パフォーマンス、ワークショップ、映像、絵画など様々な表現手法を用いて制作活動をしている各作家の作品を展示室のみならずエントランスから廊下に至るまで適所に展示し、来館者が各作品をゆるやかに結びつけながら観覧できるような構成で、展示会の趣旨をひととき体感させることとなった。

また本展では、関連事業を精力的におこなったが、なかでも「ホンマタカシ サテライトマルガメ vol.2」を特記しておきたい。これは会期中、美術館近隣のカフェでホンマと大原大次郎のコラボレーションによる作品《稜線》(2014年)を、当館カフェでホンマ作品《三越包装紙》(2014年)を展示したものである。2012年に開催した展覧会「ホンマタカシ ニュー・ドキュメンタリー」の際、ホンマの提案により市内各所で作品を展示する「サテライトマルガメ」を行い、その第2弾として企画された。前回、今回ともに、美術館の来館者を館

内に留まらず館外へと誘い、近隣の展示場所を巡ることでホンマの作品がいつそう堪能でき、さらに囿らずも市内観光ができる仕組みで遠来のお客様をもてなすと同時に、丸亀市民にとっても商店街での展示は経済的効果のみならず、美術館との心理的距離が近づき、作家や作品への関心が高まるなど好評であった。今回は個展ではないため規模は縮小したものの、当館が顕彰する画家、猪熊弦一郎の仕事をもホンマが被写体とした《三越包装紙》は、ホンマ作品の一貫した魅力を伝える一方で、市民にとって既に身近な存在となっていた猪熊を改めて意識する機会となるとともに、「拡張するファッション」展を目指しての来館者に猪熊を紹介するきっかけともなった。館外での展示は、ホンマの強い意欲、深い理解があつてこそであり、作品の保全、管理の面での課題が多いため実施が難しいが、今後も地域の文化振興の拠点となる施設として多くの人に親しまれるようなさまざまな取り組みを続けていきたい。

高松市美術館では2009年から始まった現代美術の展覧会「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」(5月27日～6月22日)が今年も開催された。本年度で5回目となり、毎回、気鋭のアーティストを紹介する展覧会として定着してきた感がある。残念ながら同館は2015年1月から2016年3月までの予定で改修工事のため休館する。ほか瀬戸内国際芸術祭2016の開催が決まり、9月には基本計画が示された。前回同様、開催期間を春、夏、

秋の3期に分け、県内全域にある多数の島々および高松港周辺、岡山の宇野港周辺を巡るプランである。過去の芸術祭での作品を活かしつつ新たな展開がなされるであろう。

高知県立美術館では、作家およびご遺族から膨大な数のプリントやフィルムのみならず、カメラ機材や蔵書などの寄贈を受け、整理が続けられてきた石元泰博のコレクションを展示する専用の展示室が10月にオープンした。ここまでの道のりは、たいへんなものであつたと推察される。初回の展覧会が始まったところではあるが、今後、展示替をしながら紹介していくとのことで石元作品を普及する一大拠点としての活動が期待される。また同館では、展覧会と並んでホール事業として映画上映や演劇、ダンス公演などを多彩に展開し、四国ではなかなか見られないような先鋭的なプログラムを紹介している。10月に行われた「TWERK ーダンス・イン・クラブナイトー」は、爆音のなか男女5人の

ダンサーが舞台上でくるくと回っている状況のなか観客が入場する。その後は、DJによる音楽がリードするスピード感があふれる進行で、肉体を駆使した動きに驚愕し、性的なふるまいが笑いを引き起こしといったふうで、約1時間の公演中、興奮し続ける圧倒的な内容で観客を楽しませた。

徳島県立近代美術館は、特別展「三嶽伊紗のしごと みているもののむこう」(4月26日～6月15日)、「生誕140年・没後60年記念 水彩表現の開拓者 三宅克己」(10月11日～12月7日)を開催するなど、独自の視点が光る展覧会が続いている。さらに四国四県の連携として「四国霊場開創1200年記念 空海の足音 四国へんろ展」が高知県立美術館、愛媛県美術館、香川県立ミュージアム、徳島県立博物館の各会場で、同テーマのもと地域の文化を反映した独自の内容で開催された。今後も四国内の各美術館の活動をご期待いただきたい。



「拡張するファッション」展示風景

九州地区の動き

園田博一（そのだひろいち・宮崎県立美術館）

本年度の九州での主な話題をまとめてみたい。

うれしい話題のひとつは、大分県立美術館のオープンである。2015年4月24日、大分市寿町に開館予定である。1977年9月に開館した大分県立芸術会館が老朽化していること等を踏まえて、大分県では、2010年1月から大分県美術館構想検討委員会を開催し、新しい県立美術館の必要性やあり方などについての検討が行われた。大分県では、委員会の答申を受けて2011年2月に美術館を新設する方針を表明。同年5月30日に、大分市のOASISひろば21（大分県立総合文化センター）の国道197号（昭和通り）を挟んだ北側の土地に、新美術館が建設されることが発表された。大分県立芸術会館は2014年12月から休館し、県立美術館の開館後には廃止される予定である。芸術会館の所蔵品は南画の田能村竹田や近代日本画の福田平八郎・高山辰雄、洋画の宇治山哲平、彫刻の朝倉文夫、竹工芸の生野祥雲齋など近世以降の大分県出身と大分ゆかりの作家を中心とした約5,000点に上るが、それらは県立美術館に引き継がれることになっている。新美術館長にはフリーランスのキュレーターであり、武蔵野美術大学の教授も務める新見隆氏を迎える。大分の歴史・文化や風土を理解しながら学芸員とともに現在開館の準備に追われているようだ。Oita Prefectural Art Museumの頭文字を用いて「OPAM」（オーパム）と名付け、シンボルマークがデザインされている。コミュニケーションデザインは平野敬子氏と

工藤青石氏がユニットを組んで担当している。シブシブな中にシャープで力が入ったものとなっている。OPAMの建築設計を手がけるのは坂茂氏である。組木の構造体と、可変可能な空間の設計によって、新しい美術館の在り方を提案してくれるという。坂氏は2014年建築のノーベル賞ともいわれるブリツカー賞を受賞された。坂氏が手掛ける、日本では初となる公立美術館であり、その驚きの全貌が楽しみだ。オープン記念展では海外からの作品と大分のものとの競演が演出されるようで来春のオープンが待ち遠しい。

二つ目はちょっと寂しい石橋美術館の久留米市からの撤退である。6月29日の西日本新聞一面報道では、「石橋美術館960点 東京へ」の見出しが躍った。石橋美術館を運営する石橋財団（東京都港区）は同美術館に収蔵する美術品960点を、2016年秋までにブリヂストン美術館（東京都中央区）に移管することを発表した。ご存じのように石橋美術館はブリヂストンの創業者の石橋正次郎氏が建設して久留米市に寄贈し、1956年に開館した。市は77年から財団に施設を無償で貸与し、運営は財団が負担してきた。今回、財団は公益財団法人化に伴って事業内容を見直し、石橋美術館の運営から撤退することとした。主な収蔵品として同市出身の洋画家、青木繁の代表作《海の幸》《わだつみのいるこの宮》同じく坂本繁二郎の《放牧三馬》、古賀春江の《素朴な月夜》、それに藤島武二の《天平の面影》など近代日本美術を代表する作

品が多く含まれている。開館から半世紀以上経つなかでの知らせに、久留米市民はもとより九州のファンにとっても大きな驚きとなった。「国民に広く鑑賞の機会を提供する必要がある」と移管の理由を説明されたが、東京への一極集中や優品を市民が鑑賞できる機会が大幅に減ることになり市民や関係者は落胆しているようだ。市としての今後の運営の在り方や展覧会企画が注目される。宮崎県立美術館は2009年度に石橋美術館との交換展を行った経緯があり、筆者自身思い出も大きいものがあり、今回の動きは残念でならない。

次に近隣美術館の展覧会を紹介する。夏休みに石橋美術館開催の「アートで対決」（4月26日～9月28日）を見る機会を得た。テーマ設定の切り口がおもしろく、撤退の件を知る前でコレクションの豊かさをうらやましく思った。九州国立博物館では「クリーブランド美術館展」（7月8日～8月31日）があり、日本美術の持つ力を確信した。10月には鹿児島市立美術館開催の「海老原喜之助展」

（10月2日～11月9日）があった。生誕110年を記念し、その全貌と色彩の美しさ、力強い造形を再確認できるものとなっていた。10月末には大分市美術館で「有元利夫展」（10月24日～12月7日）を堪能した。デビュー当時から心惹かれる作家で、静謐で典雅な空気が会場に満ちていた。11月の都城市立美術館では生誕120年展「鱸利彦（すずき・としひこ）」（11月1日～12月14日）が開催された。宮崎に育ち、明治から大正、昭和を歩み、写実を基調に展開された画業の全貌が紹介された。

最後に宮崎県立美術館の活動のひとつを紹介する。「わがまち」いきいきアートプロジェクト『小さな町の大きな美術館』（9月20日～11月30日）と銘打って、県の最北、日之影町の鹿川地区で行われた。県内の彫刻作家2人を招聘し、約3週間現地滞在してもらい地区の持つ地場資源を活用して空間を創出してもらった。山と川、竹林と空で構成された壮大な空間ができた。今後の展開に期待していただきたい。



建設途中の大分県立美術館 10月24日撮影

「わがまち」いきいきアートプロジェクト
『小さな町の大きな美術館』
日之影町鹿川

保存研究部会

相澤邦彦（あいざわ くにひこ・兵庫県立美術館）

保存研究部会では、これまで各年2回の会合を部会員の所属館で順次開催し、各館のバックヤードツアー、外部から専門家を招いて講演いただくことや、テーマを設定したうえで勉強会を行い、過去には「学芸員による学芸員のための虫・カビ対策ノート」や「ファッション・レポート」ひな形の作成にも取り組んだ。また会合以外でも、メーリングリストを通じて様々な情報共有や意見交換を行ってきた。

昨年度は保存研究部会としての活動を休止し、保存研究部会員と全国美術館会議会員館の有志によって新たに構成された「東日本大震災美術館・博物館総合調査分科会」として、東日本大震災における各館の被災状況や影響の調査とその報告書作りに取り組み、2014年5月に報告書が発行された。なお報告書は既に各調査対象館、各会員館などに発送済みである。

調査の完了と報告書完成を受けて、今年度から保存研究部会としての活動を再開し、先の10月7日、8日と碧南市藤井達吉現代美術館で約1年半ぶりに会合を行った。1日目は外部講師として、国内の美術館、博物館においてはじめての保存担当者として活躍し、美術品の素材、技法、保存科学に精通されている国立民族学博物館名誉教授、東京藝術大学客員教授の森田恒之氏を招いて、美術館、博物館における保存、現代美術作品の保存と修復など、幅広く貴重な講演をいただいた。またこれを受けて行われた質疑応答と森田氏を交えたディスカッションにおいては、香料を使った作品、写真、プラスチック、アクリル絵具、また作品の「オリジナル」についてなど、さまざまな意見交換が行われた。その後、同館の収蔵庫を含めたバックヤード、展示室及び開催中の企画展「メタルズ！—変容する金属の美—」展示ケースや照明器具等、同館における作品保存上の工夫について保存担当学芸員の解説を受けつつ見学した。

2日目は約2時間にわたり、以前より作成を進めて

いた「コンディション・レポート」のひな形に関して協議と意見交換を行った。「コンディション・レポート」のひな形づくりは研究部会として2009年より取り組んでおり、特に国内巡回展の作品借用時に使用することを想定して議論を続け、試用が可能な書式も出来上がっていたものの、東日本大震災の発生とその後の総合調査実施及び報告書の作成などで、しばらく議論を中断している状態だった。

この日の協議ではこれまでの取り組みの経緯を再確認し、また今後の方針として基本的にひとつの書式を用いつつ、油彩画、日本画、工芸、立体などの分野ごとに仕様を調整し、今後2年間程度で完成を目指すこととなった。

次回の会合は2015年2月に、高知県立美術館で開催する。同館内に石元康博フォトセンターがオープンしたこともあり、会合には写真の保存修復に携わる外部専門家を招いて、講演会を開催する予定である。また写真及び現代美術作品の保存修復については、次年度も継続して議論を続けていく予定である。



第44回会合（碧南市藤井達吉現代美術館）

教育普及 研究部会

遊免寛子（ゆうめん ひろこ・兵庫県立美術館）

教育普及研究部会では、例年2回の会合を開催している。今年度は1回目の会合を9月18日、19日に実施した。1日目は千葉市美術館の講堂にて、千葉市美術館学芸員の山根佳奈氏が「WiCAN プロジェクトを通して～なぜ美術を学ぶのか」という題目で発表した。2003年から始まった千葉アートネットワーク・プロジェクト（WiCAN）は、千葉市美術館、千葉大学及び大学生、学校、アーティスト、まちづくりのNPOなどが核となったネットワークによる活動で、毎年異なるテーマで社会におけるアートの価値や意味を問い続けている。会合では、昨年度のテーマ「アート×教育=？」プロジェクトの「なぜ美術を学ぶのか」という、誠に根源的な問いかけに基づく美術館と学校の連携による鑑賞学習の取り組みについて発表があった。美術という愛好者だけの問題に終始しがちだが、そこに教育という視点に加わると、学校教育や社会教育などとの関わりを通して、受け手の幅が大きく広がる。人が生涯にわたって美術を学ぶ意味、ひいては社会において美術が果たす役割とは何かを見つめ直すきっかけになる。近年、地域や大学との連携に取り組む美術館・博物館は少なくなく、社会的にも関心が高まっているが、肝心なのは、何をするか（方法論）ではなく、何のために行うのか（目的）と、関わる人全員が当事者意識を持って、連携する意義を真剣に

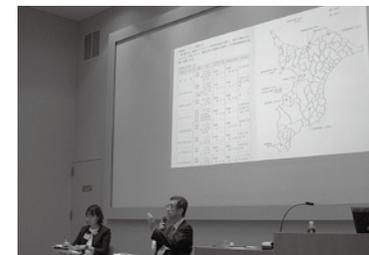
考え、それを共有することであると改めて認識することができた。

2日目は、国立西洋美術館の講堂に会場を移し、当部会の部長である長崎県美術館長・米田耕司氏に美術館の教育普及の草創期に関するインタビューを行った。過去の部会報告でもくり返し触れているが、当部会では、日本の美術館における教育普及の草創期の活動を後世に継承すべく、定期的に公開インタビューを行い記録している。今回のインタビューでは豊富な図版資料を参照しながら、米田氏が開館準備から長きにわたり関わった千葉県立美術館での具体的な活動とその基本理念についてお話しいただいた。誰もが分け隔てなく利用できる美術館の施設設計、地域社会における美術館のあり方を考えた収集・展示・教育普及の諸活動、動物園や博物館など他分野の学芸員や図書館司書、社会教育主事との交流による視野の拡大等、後続の世代にとって大いに学び励まされる内容であった。今回のインタビューも、会員館のメンバーと共有できるよう努める。

今年度の2回目の会合は、2015年3月の開催を予定している。内容の詳細は現在検討中だが、各館の担当者が会合を通してそれぞれの教育普及活動の目的や意義を見つめ直し、前向きに取り組む意識を持ち続けられるよう今後も企画を工夫していきたい。



第44回会合 千葉市美術館の活動紹介



第44回会合 米田館長インタビュー

情報・資料
研究部会

川口雅子 (かわぐち まさこ・国立西洋美術館)

情報・資料研究部会が2年越しで取り組んできた美術館の収蔵作品目録をめぐる取り組みもいよいよ終盤に差しかわろうとしている。最終的には成果をオンラインで公開することを予定しており、この度ウェブサイトの名称も『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』とすることが決まった(以下、『全美術目録総覧 2014』)。『全美術目録総覧 2014』は、美術作品の全国所在調査に役立つ基礎資料の作成を目的に、全国美術館会議会員館の収蔵作品目録をデータ収集の範囲として、その書誌情報を一覧にまとめたものである。

そもそも本計画の背景には、「文化遺産オンライン」で試みられているような、全国美術館の収蔵作品を網羅するデータベースの構築という理念がある。しかし本研究部会の活動としては、この壮大な事業に挑むのはあまりに大規模で途方もない話であり、現段階では総点数の把握さえ覚束ないと考えられる。そこで現実的な活動目標として掲げたのが作品データ収集の過程で必要となる参考図書を一覧にすることであった。そのため本総覧には美術作品データではなく、図書データが収録されている。

計画の発足からこれまでの間、本誌等で報告してきた通り、国立情報学研究所学術情報ナビゲーター「CiNii」や国立国会図書館蔵書検索システム等のオンライン資源による書誌データ収集を行う一方で、図書館での現物確認やアンケート形式の調査などを実施してきた。とくにアンケート調査に際しては、各館の多大なるご協力を賜ったことに深く感謝したい。

今年度はこれらの成果をとりまとめ、会員館向けホームページで限定試験公開を実施したところである。試験版に対する会員館からの修正意見等は僅かであったが、これを受けてデータの追記修正も行った。内容確認などに手間取り、本稿執筆段階では試験公開にとどまっているが、本号が刊行される頃には公開されている予定である。

それを前にして少し気が早いのだが、プロジェクトの集大成として、本部会は今年度の学芸員研修会の実施を担当させていただくことにした。全体を2部構成とし、第1部では『全美術目録総覧 2014』の経過報告を行い、第2部では本総覧にまつわるふたつの論点を取り上げる予定である。

ひとつは、収蔵作品目録では概ね作家名・作品名・制作年・技法・支持体・寸法といった基本項目が中心となるが、美術館が伝えるべき作品の情報とは果たしてそれだけなのかという点である。そしてもうひとつは、『全美術目録総覧 2014』に収録された資料はどこで閲覧できるのかという点である。後者では学芸員の調査研究基盤としての図書室のあり方が問題となるが、これは同時に、前者の作品情報の中身を問うことにも絡んでくる構造的課題とも言えよう。情報・資料をめぐるこうした議論が活発に展開するような場としたい。



『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』画面(部分)

小規模館
研究部会

横山由美子 (よこやま ゆみこ・浜田市立石正美術館)

2014年度の小規模館研究部会は、まず5月23日、第63回全国美術館会議総会に合わせて第39回会合を開いた。ここでは、当部会の今年度の活動計画について話し合われた後、「小規模美術館の運営について—指定管理者制度、私立美術館それぞれの現状—」をテーマに美術館運営制度研究部会との合同会合も行われた。当部会加盟館の中から公立・私立あわせて5館の代表が、それぞれの運営の現状や問題・今後の課題などを発表した。その後の意見交換では、運営に関する問題は規模の大小にかかわらず多くの美術館が抱えていることでもあるので、今後全美のもと開かれた場で情報交換することが望ましいのでは、との意見も出た。

第40回研修会は、10月28日、29日に浜田市立石正美術館を会場に、「地域と美術館の関わり」というテーマで開催された。浜田市では、ここ数年の間に市内の小中学校が次々に統廃合され少なくなっている。今後各学校にある美術品が散逸することのないよう、2011年より全小中学校や市役所、図書館、公民館など全ての公共施設にある美術品の調査を3年かけて行った。また、この調査結果をもとに、浜田市世界こども美術館において二つの展示会も開催された(「浜田の美術—過去・現在、そして未来へ—」2013年/「日本の中のはまだの美術—感動とともに生きた人々—」



第39回会合(広島県立美術館)

2014年)。今回の研修会では、この悉皆調査と展示会企画を一人で行った浜田市世界こども美術館学芸課長の神英雄氏に実践報告をしていただいた。この調査・展示会の結果、人々の「地域の美術」に対する関心の高まりや、他地域との連携など当初予想していなかった波及効果を得ることができたという。本研修会を通して地域の中の美術館のあり方を考える、ひとつの手掛かりになったことと思う。

また、今年度は部会発足20年目の節目ということもあり、これまでの活動を振り返る研究討議も行った。当部会は建物や予算の規模、スタッフの数など様々な面において比較的規模の小さい美術館が集まり、小規模館ならではの諸問題をテーマにして毎年様々な研修会を行ってきた。研修テーマは毎年変わるが、部会としての一貫した目標は館同士の相互協力・情報共有のためのネットワークづくり。これまでに、研修会以外にも加盟館同士の共同企画展の開催、講演会講師として各学芸員の派遣協力など、部会活動を通して生まれた連携が各館にとって有益に活用されている例もある。

人員不足、あるいは職員の入れ替わりにより身近に経験豊富な相談者がいないなど、不安を抱える小規模館職員も少なくない。この度の振り返りを今後の活動内容に生かしつつ、引き続き館同士のより良い関係づくりができればと思う。



第40回会合(浜田市立石正美術館)

ホームページ 部会

宮武 弘 (みやたけ ひろし・福島県立美術館)

ホームページ部会は、全国美術館会議ホームページ（以下全美ホームページ、<http://www.zenbi.jp>）の運営にあたって、全美事務局、パークウェブ社と連携しながら活動している。全美ホームページは2012年のリニューアルによってCMS（コンテンツ・マネジメント・システム）へと移行したことで現在、日常的な更新業務の多くは事務局で担当しており、4名の部会員は他の部会との調整を要する案件をはじめ、ホームページ全体に関わるサポートを行っている。

2014年度上半期の活動であるが、まず5月23日に広島県立美術館において第27回会合を開催し、全美ホームページの現状と課題について意見交換を行った。CMS導入から2年が経過したことで、各コンテンツの更新は概ね、スムーズに行われるようになってきており、前日に開かれた第63回全国美術館会議総会における各研究部会の活動報告でも、全美ホームページがようやく会員間に根付いてきたことが実感された。一方で、ホームページを活動成果発表のツールとして活用する部会や活動が増加していることから、当部会がどのように関わっていくべきなのか、今後の方針について整理が必要との声も挙がった。さらに会合では、更新漏れや新たに掲載すべき情報のリストアップ、「法令・規則リンク」および部会活動一覧の追加修正など、さまざまな角度からホームページのチェックを行ったほか、会員IDの管理やサーバ容量の確保など、今後のホームページ運営にかかわる懸案事項についても確認した。

会合での協議をふまえ、6月には東日本大震災美術館・博物館総合調査分科会との連絡調整を経て『東日本大震災美術館・博物館総合調査報告』のPDFデータを会員館ページに掲載。続いて8月には「東日本大震災特設サイト」を中心に更新、

修正作業を実施した。震災後3年半が経過し、震災関連情報へのアクセス数も徐々に低下している現状ではあるが、特設サイトを含め、全美ホームページのブラッシュアップ作業は日々継続している。なお当部会では一昨年の体制替え以降、会合開催は原則年1回とし、平時のやり取りはメールや電話連絡に留めてきたものの、やはりそれだけでは目の行き届かない部分も出てくる。次年度以降は何らかのかたちで、部会員による共同作業の場を定期的

に設けていくことになるだろう。ところで、ホームページ部会が発足し、第1回会合を開催したのは2004年10月のこと（当初の名称はホームページ開設・運営研究部会）。したがって今年度は部会発足10周年という、節目の年となった。当時、全美ホームページの開設にあたって私たちが掲げたスローガンは「お役に立つこと、続くこと、内にも外にも向かうこと」であり、この思いは10年を経た現在でも変わらない。今後とも、全美ホームページに一層のご愛顧をいただければ幸いである。



第27回会合（広島県立美術館）

機関誌部会

尾崎信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立博物館)

前回の報告から1年が経過したが、この1年のうちに機関誌部会としては予定どおり『ZENBI』の5号（2014年1月1日発行）と6号（8月1日発行）を発行した。薄手で、比較的地味な装丁の機関誌とはいえ、書架に6冊並べていただくと、それなりの存在感を醸し出してきただけではなかろうか。

内容的には特に大きな変化はない。主な記事としては、毎号、各地域の美術状況を概観する10本のブロック報告と会員館職員からの自由な投稿による「全美フォーラム」を掲載し、これらにあわせて奇数号には部会報告、偶数号には新規会員館紹介を掲載している。フォーラムに掲載した記事の内容は多様であるとはいえ、現在、美術館運営制度研究部会を中心に議論されている美術館倫理規程の問題については引き続き投稿を呼びかけ、この問題の歴史的背景について共通の理解をかたちづくるべく努力している。SNSを用いた広報のノウハウやICOMの世界大会招致といった今日的な問題が取り上げられる一方で、コレクションの構築と売却といった美術館の本質に関する問題も論じられた。いずれの話題も一般的な美術ジャーナリズムでは取り上げられることがないが、美術館に関わる者であれば関心を抱く内容であり、本誌の存在意義を示すことができたのではないかと考える。

かねてからの二つの懸案についても本年度は大き

な進展があった。まず5号から一般向けの販売を開始した。機関誌という性格上、会員館には無料で配布されながらも一般には頒布されておらず、かねてより問い合わせがあったが、現在、国立西洋美術館、東京国立近代美術館、東京富士美術館、京都国立近代美術館の4館のミュージアムショップで販売している。売価は300円であり、収入を得るというよりも一般の美術ファンも手に取っていただくことを目的としている。今後はバックナンバー、あるいは全巻揃いでの販売も考えている。もうひとつの懸案、広告掲載についても6号より掲載を始めた。現在も賛助会員各社を対象に、サイズによって広告掲載料を違えて広告を募集している。日本の主要な美術館には必ず配布される冊子であるから、広告効果は大きいはずだ。今後も賛助会員各社からの出稿を期待している。なお賛助会員についてはこれまで会員館の名簿に掲載することによってしか周知していなかったが、やはり6号より誌面中の1頁に会員各社を一覧で表記し、謝意を表すこととした。

販売と広告、今年度はいずれも試行的な意味で取り組みを始めた。販売に関しては上記の美術館以外に拡大することも可能であり、さらなる広告の出稿は大いに歓迎する。いずれの場合も希望があればひとまず事務局にお問い合わせいただきたい。



国立西洋美術館のショップの風景（中央面置きが『ZENBI』）



第18回会合（京都国立近代美術館）

美術館運営制度 研究部会

大島徹也 (おおしま てつや・愛知県美術館)

美術館運営制度研究部会では、ICOMの「博物館倫理規程」(2004年改訂版)、日本博物館協会(以下、日博協)の「博物館の原則 博物館関係者の行動規範」(2012年)を参考にしつつ、全国美術館会議(以下、全美)による「美術館関係者の行動規範」(仮題)の制定についての検討を、一昨年度から引き続き進めている。

本年度はまず、昨年度の第18回部会(2013年5月31日、栃木県立美術館)での議論に基づいて、全美版行動規範の必要性の有無や、必要とされる場合の規範の方向性を会員館に伺うべく、2014年4月1日から6月15日に全会員館を対象としてアンケートを行った。

アンケートは1会員館につき1公式回答をお願いするほか、会員館所属の職員であれば誰でも非公式な回答を寄せてもらえるようにした。アンケートでは、全美版行動規範の必要性について、「作ったほうがいい／必要ない／現時点ではどちらとも言えない」のいずれかを選択してもらい、「作ったほうがいい」もしくは「現時点ではどちらとも言えない」と回答した館と個人には続けて、規範に盛り込むべき項目や規範作成上の留意点などについて自由記述形式で伺った。規範の必要性の有無についての回答結果は次の通りとなった。

○公式回答総数= 52 (371 会員館の 14.0%)

内訳 ・「作ったほうがいい」= 15 (28.8%)
 ・「どちらとも言えない」= 13 (25.0%)
 ・「必要ない」= 24 (46.2%)

○非公式回答総数= 39

内訳 ・「作ったほうがいい」= 19 (48.7%)
 ・「どちらとも言えない」= 14 (35.9%)
 ・「必要ない」= 6 (15.4%)

○公式回答・非公式回答統合総数= 91

内訳 ・「作ったほうがいい」= 34 (37.4%)
 ・「どちらとも言えない」= 27 (29.7%)
 ・「必要ない」= 30 (33.0%)

上記のアンケートを実施する傍ら、本年度総会の翌日に第19回部会(2014年5月23日、広島県立美術館)を開き、アンケートの途中集計結果を参考にしつつ全美版行動規範についての検討を改めて行った。そこでは、「設置主体に対して美術館側から何か主張をする際の後ろ盾となるようなものが制定できればよい」、「細かな規範集ではなく、美術館憲章のようなものでもよいかもしれない」、「美術館独自の行動規範を新たに制定せずとも、既存の日博協の行動規範を美術館として応用的に利用していけばよいのでは」、「日博協の行動規範は良く考えられて出来ているので、その個々の条文について、それは美術館の場合にはどうということであるのかを説明するようなものを作成したらどうか」といったさまざまな意見が出された。

当部会としては、全美版行動規範について、制定されるか否かも含めてそれが最終的にどうなるにせよ、関係するさまざまな個々の問題を議論するプロセス自体も大いに有意義であると考えている。また、何らかの叩き台がないとこれ以上検討は本質的に進まないようにも思われる。そこで現在当部会では、6月15日に終了したアンケートの結果を参考にしつつ、規範の叩き台の作成を進めている。それが一段落した時点で次の部会を開く予定である。

地域美術 研究部会

山田 諭 (やまだ さとし・名古屋市美術館)

地域美術研究部会は、2014年3月の第28回学芸員研修会「地域からの拠点—美術史の再構築に向けて」での提案を受けて、第63回総会で創設が承認された新部会である。

美術館にとって、その美術館が存立する地域における美術の歴史を調査・研究して、歴史的に重要な作品を収集・保存するとともに、展示・公開することは、その地域の美術の伝統を継承して、新しい美術の創造に寄与するために、重要な基礎的活動である。これまで日本の美術館においては、地道な調査・研究によって、「地域美術」の豊かなコレクションが形成されてきたが、常設展や研究紀要などで紹介されるばかりで、全国的には知られないままにあった。このような現状を踏まえて、全国各地の「地域美術」に関する情報交換を進めるとともに、新たな「地域美術」の調査・研究を促して、全国の美術館(学芸員)の相互協力を図って、将来的には「地域美術」の観点から新しい美術史を総合的に研究することを、部会の活動の基本方針・目標としている。

今年度は、7月31日に準備会合を開催して、年度ごとに2回程度の部会合を、全国美術館会議の地域ブロック(10ブロック)にある美術館を会場として、継続的に巡回開催すること、内容としては、会場とな

った美術館における「地域美術」の調査・研究についての事例発表と「地域美術」の収蔵作品の実見を踏まえて、参加者全員(部員およびオブザーバー)での質疑応答・情報交換と討議を行うことなどを確定した。

記念すべき第1回会合は、東海ブロックの名古屋市美術館と岐阜県美術館を会場として、11月11日、12日に開催した。事例発表として、「名古屋の近代美術史(洋画編)」(山田諭/名古屋市美術館)では、明治期から昭和前期(戦前)までの名古屋の洋画壇の変遷を見取図として、「地域美術」の系譜を所蔵作品に即して解説した。「飛騨の美術—明治以降の新展開」(廣江泰孝/岐阜県美術館)では、展覧会の開催を踏まえて、初めて飛騨における「地域美術」の調査・研究を行なった経験(地域に信頼されるまでの苦労や作品の修復・展示に関する対応法など)を詳細に報告した。参加者は、部会員8名をはじめとして、東海ブロックの美術館の若い学芸員などのオブザーバー13名の総計21名であったが、事例発表とともに、「地域美術」の収蔵作品を実際に見学することで、調査・研究の成果を実感するとともに、これから調査・研究を開始したいという感想があった。第1回会合後に部会員として新たに登録された参加者もあり、来年度以降の活動が活発になっていくことを期待している。



第1回会合 (名古屋市美術館)



全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	株式会社廣濟堂
有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社アトリエリーブ	全国美術商連合会
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク	大日本印刷株式会社
イカリ消毒株式会社	株式会社丹青研究所
イセ文化財団	株式会社 TT トレーディング
株式会社印象社	株式会社東京美術倶楽部
株式会社 NHK エデュケーションショナル	凸版印刷株式会社
M & I アート株式会社	有限会社トップアート鎌倉
エルコラインティング株式会社	日本写真印刷株式会社
オリゾンシステムズ株式会社	日本通運株式会社
影山幸一	株式会社パークウェーブ
カトーレック株式会社	株式会社美術出版社
公益財団法人かながわ国際交流財団	美術年鑑社 新美術新聞
湘南国際村学術研究センター	弘中智子
関西ペイント株式会社	株式会社伏見工芸
株式会社ギャラリーためなが	株式会社文化環境研究所
株式会社求龍堂	有限会社丸榮堂
株式会社キュレイターズ	ヤマトロジスティクス株式会社
株式会社グッドフェローズ	読売新聞東京本社
株式会社クレヴィス	早稲田システム開発株式会社

(五十音順)

文化財防災のためのネットワーク

企画担当幹事 村上博哉（むらかみ ひろや・国立西洋美術館）

最近のおもな動きとして、2014年10月に発足した「文化遺産防災ネットワーク推進会議」への参加についてご報告します。

ご承知のとおり、東日本大震災後の文化財レスキュー事業は、全国美術館会議（以下、全美）をはじめとする諸団体が参加した「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」が主体となって進められました。この委員会は2013年3月末をもって解散しましたが、関係者のあいだでは、2年間にわたる活動を通じて生まれた諸団体間の協力体制を、これからの文化財防災に活かそうという意識が共有されています。今回の経験を踏まえ、将来起こりうる大災害に備えるために、美術・歴史・民俗・自然科学などの分野や博物館・図書館・公文書館という館種を超えて、文化財の保存・防災に関わる全国規模の包括的なネットワークを作るべきだという意見が、さまざまな場で唱えられました。

こうした声に応じて、国立文化財機構は2014年7月に「文化財防災ネットワーク推進本部」を設置し、文化財の防災・救援に関する研究・情報発信事業とともに、将来再び大規模災害が発生した際に迅速な対応を行うための体制作りに取り組み始めました。その一環として、救援委員会の構成団体に呼びかけて「文化遺産防災ネットワーク推進会議」が組織され、全美もこれに加わることになりました。

このほかにも、防災ネットワークに関する議論は各方面で行われています。12月4日には、東京文化財研究所で「これからの文化財防災—災害への備え」と題したシンポジウムが開かれました。東日本の救援活動から得られた技術的知見と課題（津波被災資料の処置・修復、放射能対策、救援活動の記録）、文化財レスキューとは別の枠組で実施された文化財保全事業（建造物の復旧支援、埋蔵文化財の調査、無形文化遺産の復興）、愛知・三重・和歌山各県における自治体の文化財防災対策の現状についての報告の後、救援委員会の参加諸団体の代表者によるセッションが行われ、分野を超えたネットワークの必要性があらためて示されました。また、2015年1月に兵庫県立歴史博物館で開催される日本博物館協会の研究協議会「大規模災害と博物館—阪神・淡路大震災から20年を迎えて」においても、歴史・自然・考古・美術の各分野から、大規模災害対策の状況に関する報告と意見交換が行われます。

このようなシンポジウムや研究会を通じて、全美と他分野の全国組織との交流が続いてゆくのはもちろん意義あることですが、より重要なのはそれぞれの地域において、もっとコンパクトで緊密な連携体制が作られることではないかと思えます。東日本大震災後、宮城県や福島県では、県の教育委員会と県立の博物館及び美術館を中心に、県内市町村の教育委員会や文化施設、大学、史料ネットなどが参加する組織が作られ、さまざまな分野の関係者の連携協力によって文化財の救出と保全・管理が行われています。これらの例をモデルに、県単位の文化財防災ネットワークが構築され、それと全美のような各分野の全国組織がつながりをもつことが、今後のために望まれるのではないのでしょうか。

編集後記

『ZENBI』の7号をお届けする。例によって今号はブロック報告と部会報告によって構成し、「全美フォーラム」には4本の記事を掲載した。今年5月の理事会と総会で新たに「地域美術研究部会」が設置されることが決まったため、部会報告には8部会の記事が掲載されることとなった。各地域の美術をめぐる動向についてはブロック報告で、部会の活発な活動については部会報告でそれぞれレポートされており、日本の美術館を定点観測するという本誌の意義も次第に明確になってきたように思う。充実した報告を寄せていただいたブロック報告の執筆者と各部会の幹事の皆さまにあらためて感謝を申し上げる。

機関誌部会の部会報告にも記したが、今年度は『ZENBI』にとって懸案であった二つの課題に前進をみた。5号より一般向けの販売を開始し、国立西洋美術館、東京国立近代美術館、東京富士美術館、京都国立近代美術館の四館のミュージアムショップで販売している。また前号より広告の掲載を始めた。販売と広告については今後も拡大を予定しているので、販売の希望、広告掲載の希望があれば、事務局まで御連絡いただきたい。

毎年、この記事執筆している時期、今年の美術展ベスト3のような記事が新聞紙上をにぎわす。華やかな話題の一方で、現在、多くの美術館がかつてない苦境を経験していることも事実である。美術館を横断する組織の機関誌として、本誌はこのような苦境に言葉を与えていかなければならないと感じている。この意味でも「全美フォーラム」に対する積極的な投稿を期待している。

創刊以来、機関誌部会の事務幹事を務めていただいた京都国立近代美術館の松山利光氏が今号で退任される。松山幹事には煩瑣な事務作業を一手に引き受けていただき、本誌が順調に号を重ねることができたのはひとえに松山幹事に負っている。あらためて深く感謝を申し上げたい。なお、松山幹事の後任には部会の中より京都国立博物館の青山杏子氏が就く予定である。 (O)

『ZENBI』では、 次の要領で広く皆さんからの 原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・ 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・ 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・ 原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・ 全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・ 匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・ 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・ 第8号(2015年7月発行予定) に関しては4月30日、
第9号(2016年1月発行予定) については10月31日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

〈メールの場合〉

s-osaki@pref.tottori.jp

〈郵送の場合〉

〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事 尾崎信一郎

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについても上記まで御連絡下さい

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。